

文 献

- 1) Essen-Möller, L.: Halban-Seitz, VII, 1, S. 907, 1929. 2) 藤堂参伍：千葉醫學會雜誌, 16, 3, 645頁, 昭13. 3) Domak, G.: Kl. Wschr., Nr. 21, S. 1011, 1925. 4) Berblinger, E.: Zieglers Beitr., 103, S. 545, 1939. 5) 木下良順：日本臨尿, 6, 1, 42頁, 昭23. 6) Masugi, M.: Zieglers Beitr., 91, S. 82, 1933. 7) Jürgens, T.: Berliner Kl. Wschr., 23, S. 519, 1886. 8) Fahr, T.: Zbl. Gynäk., 52, S. 474, 1928. 9) 落合名三郎：日本醫科大學雜誌, 9, 1, 1頁, 昭13. 10) Zangemeister, W.: Zschr. f. Geburtsh. u. Gynäk., 81, S. 491, 1919. 11) Pal, J.: Med. Klin., 18, S. 93, 1921. 12) Cushing, H.: Amer. J. Path., 10, P. 145, 1934. 13) Kraus, E.J.: Med. Klin., 31, S. 1641, 1935. 14) Spark, C.: Arch. Path., 19, P. 475, 1934. 15) Knepper, R.: Kl. Wschr., 49, S. 1751, 1934; Virchows Arch., 296, 1939. 16) Hoffbauer, J.: Zbl. Gynäk., 42, S. 574, 1918. 17) Fauvet, E.: Arch. Gynäk., 155, S. 100, 1934; Kl. Wschr., 46, S. 2125, 1931. 18) Küstner, H.: Arch. Gynäk., 133, S. 331, 1928. 19) Anselmino u. Hoffmann: Zbl. Gynäk., 58, S. 2363, 1934. 20) Weichardt, W.: Dtsch. Med. Wschr., 35, S. 624, 1902.

抄 録

視丘下部一脳下垂體系の血管構造竝に血管連絡の研究

第2編 静脈の研究

岡山醫科大學北山内科教室 (主任 北山加一郎教授)

助 手 大 藤 眞

第1編に述べた如く、視丘下部一脳下垂體系の血管構造は從來不明の點が多いが、就中静脈系に關しては、其の動脈系よりの分別困難なる爲、解明せられざる點特に多く、例へば脳下垂體體部の静脈主幹にしても、或は柄部に上行すると謂ひ(Dandy & Goetsch, 1911)、或は側方(V. basilaris)及び柄部に通ずると謂ひ(Fuchs, 1924)、或は總てS. cavernos.に通ずると謂ひ(Wislocki, 1936—'38)、其の他全く逆に Pars tuberalisより脳下垂體體部に静脈血が下行すると謂ふ者(Basier, 1932)もあり、全く一致した見解が無い。尙間腦と脳下垂體の静脈性連絡に就いては曩にFuchsが認めたが、近時Wislockiは之を強く否定してゐる。

余は前編既述の「マウス」の實驗に加ふるに、頭蓋底楔狀骨に密着せる脳下垂體の透明竝に連続各種標本を製作して檢索し、從來の諸説を根本的に是正する所見を得た。尙動、静脈分別は2重色素注入によつた。以下結論を述べる。(新)は自家呼稱。

(1) 漏斗及び脳下垂體柄部の静脈は、表層 Sinusoidより始る淺部静脈 V. infund. superf. (新)と、第3脳室底より始る深部静脈 V. infund. prof. (新)と有る。前者は漏斗周圍に集合して波狀の静脈輪を形成し、夫より10數本の連絡枝を以て漏斗外廓を離脱し、1本の特異なる漏斗圍繞環狀静脈(新)に流入する。然る後其の各所より視丘下部軟腦膜静脈網 V. hypoth. ant. superf. (新)に合流する。

此の静脈網は Praeoptic area 全面に擴る管腔大なる静脈より成り、脳下垂體と腦實質の液體性連絡路として極めて注目せられる。次に後者は 1~2 の静脈幹として兩側深部より視丘下部深部静脈 V. hypoth. ant. prof. (新) に合流する。斯様にして漏斗、柄部の静脈血は總て灰白結節内に歸納せられ、脳下垂體體部には合流しない。

(2) Pars tuberalis 静脈は漏斗と同様に淺、深 2 種〔V. tuber. superf. et prof. (新)〕有り、夫々漏斗静脈と合流しつゝ之亦視丘下部淺、深静脈に注入される。

(3) 以上の如く Pars tuberalis, 漏斗及び柄部の静脈血と前葉の静脈血との間には全然静脈幹の交流連絡を有しないのであつて、此の事は門脈系（第3編述）の存在と相俟つて、脳下垂體静脈大系を最も難解たらしめたものと考へられ、同時に Fuchs, 1924; Basier, 1932 等の所論を根本的に覆するものである。

(4) 前葉の静脈血は大血液竇より次第に前方、側方、後方に放射状に集合し、前方よりは柄部を經由せず直接視丘下部淺部静脈網に合流し、側上方及び後上方よりは V. basilaris に入り〔V. hypoph. med. sup. et V. hypoph. post. sup. (新)〕側下方よりは楔状骨の S. cavernos. et S. intercaveon. に注入される。〔V. hypoph. med. inf. (新)〕就中後、側、下方へ集合し S. intercaveon. post. に入る静脈幹 V. hypoph. post. inf. (新) は最も主要静脈幹である。尙前葉から柄部に上行する静脈幹 (Dandy & Goetsch, Fuchs) も、頸部から S. cavern. に向ふ静脈幹 (Fuchs, 中谷 1941) も全然認められない。

(5) 以上の如く漏斗、柄部及び前葉の静脈系は、其の分布機構を動脈系と全然別にし、Popa, 1930 の謂へる如き動脈の同伴性静脈は全然觀られない。

(6) 中葉の静脈は、中央部よりは後葉系の静脈幹 V. comm. hypoph. post. (新) に注入し、側部よりは直接に、或は前葉よりの枝を介して V. basil. に合流する。

(7) 後葉の静脈血の大部は、後葉内を前後に縦走する主要静脈幹に集合し、之より A. comm. hypoph. post. (新) に同伴する連合静脈 V. comm. hypoph. post. (新) を經由して、兩側 V. basil. に合流する。側部よりは直接兩側 V. basil. に注入する數本の小静脈 V. hypoph. med. prof. (新) が有る。

(8) 脳下垂體被膜静脈は細部迄該部動脈系と同伴して走行し、下面よりは連合静脈 V. comm. hypoph. inf. (新) によつて V. basil. に注入し、上面よりは V. comm. hypoph. post. に入るが、之等と脳下垂體實質の静脈との間には吻合は認められない。

(9) 視丘下部の静脈は動脈同様に淺深兩系に別けられる。其の中 Praeoptic area の淺部静脈 V. hypoth. ant. superf. (新) は漏斗、柄部 Pars tub. 並に前葉 (1 部) の静脈血を收容し、特異なる蛇行狀大静脈網を形成し、結局前後數ヶ所より V. basil. に合流する。深部静脈 V. hypoth. ant. prof. (新) は第3腦室の兩側に分布し、漏斗、柄部、Pars tub. の深部静脈血を收容する。Hypothalamus (狹義) の淺深静脈 V. hypoth. post. superf. et prof. (新) は夫々動脈に對應して數個の竹筴様静脈幹が V. basil. に入る。

(10) 脳下垂體と視丘下部の静脈性連絡は脳下垂體各部 (漏斗、柄部、Pars tub., 前葉前縁) と視丘下部の V. hypoth. ant. superf. との間、及び漏斗、Pars tub. の深部と V. hypoth. ant. prof. との間に廣範圍且つ緻密に存在する事が確認せられ、以て Wislocki の否定説は静脈系に於て更に一段と確實に反證せられた。

摺筆するに當り御懇篤なる御指導並に御校閲を忝うせる恩師北山教授並に標本製作上懇ろなる御教示を賜りたる浦教授に深甚の謝意を表す。

(本論文原著は岡山醫學會雜誌 61 年 3 號の別巻とし發行してありますから、御入用の方は著者に御請求下さい。)